
陽菜の一日

KI RARA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽菜の一日

【Zコード】

Z0945Z

【作者名】

KI RARA

【あらすじ】

26歳OL一人暮らし。

「恋愛はもういい」と言いながらも、恋愛と無縁では生きられない陽菜のこれからは、一体どこへ向かうのか。ストーリーのないまま進む物語。

定時で仕事を終わり、一人の家に帰った陽菜は、荷物を置き、床の上に敷きっぱなしになつて來客用の布団の上に倒れこんだ。寝不足で、仕事中もたびたび危なかつた。

（今日これから飲み会かあ。めんどうさいな）

金曜日の夜。

以前同じ人に誘われて行つた飲み会も当たりだつた。今回も期待していいはずだ。

彼氏のいない〇〇としては、気合いを入れて行くべき合図。しかし今の陽菜は、乗り気にはなれなかつた。

（それよりも）

こうして布団に顔をうずめていると、今朝ここにいた男の手の感触を思い出してしまう。

その手がどんな風に腰に触れ、肌の上をさ迷つたか。頬をくつつけ合い、両腕にすっぽりと包まれて、自分よりも少し高い体温をどう感じていたか。

匂いが残つていなかと、鼻をひくつかせるが、彼の男性らしい匂いはかけらも残つていなかつた。今朝は匂いが残りませんようにと思っていたのに、今はそれを残念に思つてしまつ。

（いけないいけない。切ろうつて決めたのに）

正確には、今すぐ切れるわけではない。

陽菜は首を反対方向に向けて、置いてある男物のジーンズを見た。（少なくとも、あれを返さなきやいけないし）

2週間前に置いて行つた服が部屋の隅で存在感を放つてゐる。男と陽菜の付き合いは、意外と長い。

一年半前、女友達が「あ、男の子呼んだから」と当日になつて合流した男と、その日のうちにそういう関係になり、それ以来ずっと疎遠だつたのが、ここ半年で再び連絡を取り始めた。

恋愛をする気がすっかり失せていた頃、だったので、

(メールくらいなら)

と軽い気持ちで連絡を取っていたが、1ヵ月前、やはり再びこういう関係に戻ってしまったのだった。それまで毎日していたメールは、がくんと頻度が減った。

はあ、とため息をついて、陽菜は布団から身体を引き離した。

気が強くそうに見える少し濃いめのアーラインと、ジャラジャラしたピアス、それにヒョウ柄のポイントの入ったセーターにジーンズで、せつぞうとヒールの音を響かせながら、マンションの廊下を歩いた。

今年に入つてからは、出会いがどうよりも、ナルシシズムに浸るために出歩いているようなものだ。

今まで出来なかつたファッショング出かけるのが楽しくて仕方がない。そしてそれを褒められるのも快感になつていて。

結果、合コンは楽しかつた。

職種は堅実で、しかし適度に遊んでいそうな男たちだつた。男に关心を寄せられて、自分も相手に关心を持つて、話は楽しかつた。去年1年間の恋愛のもうもろで、相手の行動や言葉の端々から真意を読み取ろうという無駄な努力をしなくなつた。異性の気持ちなど、永遠に分からぬものなどと割り切ると、心が自由になり、話すのが楽しくなつた。楽しくなると、相手も楽しんでくれる。

(アイロニーだわ)

同じように、好きじゃない相手に好かれて、好きな相手に好かれないとこによくある。諦めた途端に向こうから連絡があることも。

今朝マンションで別れてからメールを寄せさない男はどうだろか。気が付くと携帯を気にしている自分がいる。

(帰りに彼の家に寄つてつちゃおうか)

しかし、こちらからメールをするのは癪だ。あんまり追いかけて、相手を慢心させてもいけない。メールが来なくて焦つてくれればいいと思う。

誘惑に耐え、陽菜は大人しく家に帰つたのだった。

この我慢も、アイロニーなのだろうか。

12月2日 金曜日（後書き）

読んでくださいありがとうございました。一日一更新をを目指しています。<http://kirara-shosetsu.seesaa.net/>でも同時掲載していますので、よろしくお願いします。

風邪を引いてしまって…すみませんが、今日は行けそうにありません。

陽菜は布団に横になりながら、携帯電話のメール送信ボタンを押した。昨夜は飲み会から帰ってきてすぐに、来客用の布団で寝てしまった。昨日の朝から落としていないメイクでまぶたが重い。肌は乾燥し、頬の辺りがアトピー肌のように乾燥している。

（今日は一日、家から出たくないな）

そんな気分のまま、ランチデートの約束をキャンセルした。すぐに相手から「いいよ」という返信が来た。

（いい人なんだよね）

今回会つていれば、デートは3回目になる。日本人ならば知らない人がいないほどの偏差値の高い国立大を卒業し、堅実かつ高収入の仕事に就いている。

良くも悪くも、遊んでいなさそうな人。それが彼の印象だった。陽菜の方は、彼よりはかなり下の大学になるものの、彼女が住んでいる地域では一番の大学を出ている。地元の合コンで出身大学を言つと決まって「すげえ！頭いい」と言う男たちの、ちょっと引いた態度にうんざりしていただけに、地元で自分よりも高学歴な人間と出会う機会を無駄にしたくはないと思う。

（なのに何でだろ）

なぜ、自分はワンルームのマンションで一人ネットマンガや小説を読んでいる方を選んでしまうんだろう。

そもそも陽菜は「平成23年は恋愛をしない年」と決めていて、実際、恋愛する気もなかつたはずだ。

友達が結婚を意識し始め、さみしさはある。しかし、自分は自分、と習いごとを始めた「もつと楽しいことはないか」と今まで興味はあつてもしなかつたことに挑戦したりした。新しい自分にどんどん気づいて、とても充実していた。

誰がどう思うかを気にしていなかつたからこそ出来たことだ。恋愛をしていたら、きっと「失敗してもいい」と思い切ることは出来なかつただろう。

それが変わつてしまつたのは、やはり1カ月前。ジーンズの男と再び素肌を合わせてから。思い出てしまつたのだ。人に触れる心地よさを。

「また会いたい」という気持ちは「いつ終わるんだろう」という不安に、簡単に取つて代わる。相手に自分の心をすべて与えてしまつた、という陽菜の本心と、不安から来るブレーキがバランスを取つた結果が、今回のランチデートだ。

（本当は分かつてゐるんだけどなあ）

陽菜の土曜日は、いつも過ぎて行つた。

(あれ、メールくれたんだ)

朝起きて、携帯電話を見た陽菜は、意外な思いでそのメールを開いた。金曜日の合コン相手からだ。

(やっぱり、義理のメールってことね)

楽しく飲んだものの、特に自分を気に掛けている人はいなかつたな、という直感の通り「金曜日はありがとう。また飲みに行こう」という特に続きのない内容だった。陽菜はお決まりの「ありがとうメール」を返信して、再び布団に沈んだ。

陽菜が再び布団から離れたのは、昼を過ぎてからだつた。

昨日は一日家の中にいたので、今日こそは外に出たいと思つたが、いかんせんお金がない。財布には千一百円。貯金はそれよりも少ない。車は持つていないので、外に出ようとすれば公共交通機関を使うことになる。手持ちの金から交通費を引いてしまつたら、一体何が出来るだろう。

仕方なく部屋の隅に散乱している請求書の明細書類を整理することにした。手に取つて見れば、9月のものまである。

(いやあ、なんて言つたか、思い切つたお金の使い方してるなあ)

乾いた笑みを浮かべながら、数字を頭で追つていく。心機一転を図り、自己啓発に目覚めたこの一年。教材を買い、資格試験に申し込み、クーポンサイトで習い事があれば飛びついた。(来年は節約と貯金を趣味にしようかな)

陽菜の日曜日は、いつも過ぎて行った。

と、一日が終わりかけた頃、一通のメールが入った。

今朝メールした金曜日の合コンの相手から、食事の誘いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945z/>

陽菜の一日

2011年12月5日22時50分発行